

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：12101
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21401020
 研究課題名（和文）テルグ語－日本語辞典の作成

研究課題名（英文）Compilation of a Telugu-Japanese Dictionary

研究代表者

山田 桂子 (YAMADA Keiko)
 茨城大学・人文学部・准教授
 研究者番号：30344831

研究成果の概要（和文）：

本研究では、世界初のテルグ語－日本語辞典を作成した。見出し語は約 6000 語である。テルグ語は話者人口においてインドで 3 番目に多く、ドラヴィダ系諸語ではもっとも多い。フィールドワークはインドと他の東南アジア等、テルグ移民居住地でも行い、その成果は見出し語の選定、語法の特長、例文の作成等に反映されている。この辞書は、報告者が 2010 年に出版した文法書（『基礎テルグ語』大学書林 2010 年刊）と併用することで、日本人がテルグ語を独習することを可能にするものである。

研究成果の概要（英文）：

In this research, a world-first Telugu-Japanese dictionary, which contains about 6,000 entry words, is compiled. Telugu language is the third largest in India and the first among the Dravidian family of languages. Fieldworks were conducted in India and also other places like the Southeast Asia where Telugu migrants reside, that was instrumental to selection of entry words, specification of words' usage, and composition of examples. This dictionary is to help any Japanese students to learn Telugu on their own by using in combination with my earlier publication of grammar book, *Basic Course of Modern Telugu* (Daigalu Shorin, 2010).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
総計	6,900,000	2,070,000	8,970,000

研究分野：インド系諸語

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：テルグ、辞書、ドラヴィダ、インド、アーンドラ

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象となるテルグ語は、日本では私を含め 2 名しか専門家がない。言語名としての知名度は高くないが、言語としては話者人口 8000 万人を超え、ドラヴィダ系諸語

としては最大、インドでは第 3 番目と（アーンドラ・プラデーシュ州の公用語）、世界的に見ても大言語である。

研究開始当初の背景としては、1990 年代後半頃からこの言語に関する様々な問い合

わせや相談が寄せられるようになったことがある。その主な理由としては、第1にIT産業の中心地ハイダラーバードを擁するアーンドラ・プラデーシュ州に日本企業が進出するようになり、現地で電力やインフラ整備などに携わる日本人が、英語も通じなければ電気もない不便な田舎で勤務し、英語のできない現地人を雇用するなどの状況が発生するようになった。彼らには最低限のテルグ語の知識が必要とされた。第2に、企業だけではなく日本のNGOなど民間助団体も現地で貧しい人々に対し農業指導や医療援助などの活動を行うケースが増加し、現場でのテルグ語でのコミュニケーションは必須となった。そして第3に、インド人ITエンジニアの中でテルグ人比率が非常に高く、日本においても彼らの人口が急増した結果、彼らと日本人女性との間の国際結婚が増加した。第4に、テルグ人が家族ごと日本に移住して妻と子供が英語を話さないケースがあり、彼らが子供を日本の幼稚園や小学校に子供を通わせる場合に学校側とのコミュニケーションが取れず、何らかの問題が発生した後人伝に私に連絡してくる、といった事件が起こるようになった。

このような経験から、私は一般の人々が自分独力でテルグ語の基礎を習得できるような実用的な文法書と語彙集を作る必要性を感じるようになった。私の本来の狭い専門は歴史学で言語学ではなかったが、二人いるテルグ語専門家のうちもう一人が文法書や辞書を作成しない旨を明言しており、加えて現在日本のインド研究業界内では若手研究者の中にこの言語をあつかう後継者がいないことから、私は責任を感じるようになり、また自分の専門知識を社会一般に役立てなければならないと考えるようになった。

1997年インド人研究者と共に東京外国語大学でテルグ語学習の集中講義を行った。その後本務先や他大学、民間団体でも要請に応じてテルグ語の講義や地域情報に関する講演を行った。東京外国語大学での集中講義では、担当したインド人研究者と共同で最初の簡単な教材を作り（ペーリ・バースカラオとの共著『テルグ語教本』全2巻、1997年）を作成した。その後、科学研究費・基盤（B）を取得し、さきの教材をもとに入門用の文法書を作成した。しかし、この文法書は辞書の部分を持たず、時間の関係上から約1200語の簡略な語彙集を付けるにとどまってしまった。その後2010年、この文法書を『基礎テルグ語』（大学書林刊）として出版したが、その際にも、紙面の関係上付録としてつけた語彙集中の見出し語の数が、更にその半分以上の量にとどまってしまった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前述の既刊『基礎テルグ語』と併用して日本人の学習者が使うことのできる、独立したテルグ語-日本語辞典を作成することである。そして、この辞書の記載内容は次のようにする。

(1) 初級としては十分と思われる約6000語の見出し語をもつ。

(2) 見出し語はテルグ文字で表記する。

(3) 日本語で適切な意味を記載する。

(4) 語の品詞、格変化（名詞の場合）、活用分類（動詞の場合）、および実用的な例文を付ける。

(5) インドのテルグ人のみならず在外テルグ人も調査対象とすることで、グローバル化の中でのテルグ語の変化を考慮に入れ、さらには方言、移民言語等のバリエーションの実態を掴んで、その成果を反映させる。

3. 研究の方法

方法としては下記の手順に従って研究を遂行した。

(1) 基本台帳（データベース）の準備：

① 1997年東京外国語大学で作成した『テルグ語教本』と既刊の『基礎テルグ語』、およびオックスフォード大学など世界各地で出されているテルグ入門書や単語帳など初歩的文献に掲載されている単語をリストアップした。

② ①でリストアップした単語に新たな資料（文書・映像音声・マイクロフィルム・インターネットのテルグ語のホームページ等）から単語を追加していき、使用頻度等から常に6000語程度を維持するように継続的な取捨選択を行って、見出し語リスト（基本台帳）を作成した。

③ ②の台帳に関し、フォーマットの設定や修正を行い、仮様式を作成した。具体的にはテルグ文字フォントの選択、単語表記（同じ単語が複数の表記方法がある場合がある）の方針、品詞、訳語や例文の表記の階層性の決定、段組み等全体的なレイアウトの様式を決める作業を行った。大体の方針が決まった後、データをそのフォーマットに合わせて成形し、仮様式を決定した。

(2) フィールドワーク： 主要な調査地域と内容は次の通り

① インド：平成22年度約10か月間の滞在期間が最も長く、他は平成21年度の3週間がある。前者の期間は本務先でのサバティカルを利用して長期滞在が実現した。このフィールドワークでは同時並行的にデータベースの作成も継続した。インド内の調査地域としてはアーンドラ・プラデーシュ州、カ

ルナータカ州、ケーララ州など南部が中心だが北・西インドにも滞在し、各地のテルグ人コミュニティを訪問して日常会話の聞き取りなど参与観察を行った。また適宜こちらが特定の語についてインフォーマントへの質問をする形でインタビューを行い、主に動詞の活用と動詞に付随する後置詞、および名詞の格変化や用法を記録し、それらを辞書の見出し語とすべきデータベースに加えて行くという作業を行った。

②マレーシア： マレーシアはテルグ人移民先の中でもっとも人口が多く移民の歴史も古い地域である。本研究中は海外調査にクアラルンプール経由便を使用したこともあり毎年のように訪問した。また、22年と24年にはマレー半島とボルネオ島に約3週間ずつ滞在し、まとまった調査を行うことができた。マレー半島ではベナン、イポー、マラッカ、クアラルンプールを訪れた。テルグ人協会、ヒンドゥー寺院、インド系モスク、インド料理レストラン等を訪れ、そこで出会う人々へのインタビューから初めてほかのインフォーマントを紹介してもらい、という手順で調査を行った。クアラルンプールには特に組織がしっかりとしてもっとも古い在外テルグ人協会があり、インタビュー以外にも資料の提供を受けた。一方、ボルネオ島ではクチン、コタキナバル、サンダカンに滞在し、同様の方法でインド系住民にテルグ人について聞くなどして情報を収集した。

③シンガポール： マレーシアに次いで整備されたテルグ人協会があり、またマレーシアのテルグ人協会とも深いつながりがある。マレーシアよりは人口が少なくコミュニティ自体は小さい。またインドの経済自由化以降の新しい移民が多く、古い移民と断絶があることが大きな特徴である。フィールドワークの手順はマレーシアと同じである。マレーシアと同様頻繁におとずれ、滞在は合計で1ヶ月以上となった。

④ミャンマー： 平成23年度に2週間滞在した。一般的には19世紀イギリス植民地時代よりテルグ人移民が多く、また軍事政権以前はヤンゴンのインド系移民の中でもっとも人口が多かった時期もあると言われる。ここでもヤンゴンのテルグ人協会、ヒンドゥー寺院、インド料理レストランなど訪問し、関係者にインタビューを行った。

⑤その他の地域は次の通り：
平成21年度、フィジー共和国10日間
平成22年度、アラブ首長国連邦5日間、スリランカ共和国2週間

(3) 資料収集：
フィールドワークの対象地域では、同時に以下のような資料収集も行った。

①文書資料： インドのデリーではネルー図書館等でテルグ語の出版物や新聞・雑誌等を参照した。また書店で販売されているテルグ語の書籍や暦など、言語資料として使用できるものを収集した。

②研究文献： テルグの言語や歴史・社会に関連する最近の研究文献や古本を図書館や書店で収集した。

③雑資料： フィールドワークの際に発見したテルグ文字の書かれた資料（例えば寺院の掲示板やチラシ、レストランのメニュー、看板など）を撮影した。

④映像資料： テルグ映画のDVDなど映像資料で販売されているものを収集した。

(4) フィールドワークと史資料の統合：

(1)の基本台帳を(2)のフィールドワークで加筆修正すると同時に、(3)で得た史資料からのサンプルを盛り込む作業を行った。その際、見出し語が6000語前後になるように調整した。また平成24年度(最終年度)には集中的に完成作業に入った。見出し語の選定や用法、例文の見直しと確認・修正作業を行い、未解決な部分に関しては最後にインターネットを活用してテルグ語新聞や個人のホームページを参照し、語法の確認や例文作成の参考とした。

4. 研究成果

成果は次の3点に分類できる。

(1) 辞書の完成

平成25年6月段階で辞書の基本的なデータベースは完成しているが、一部例文の追加や形式的な校正が残っている。今後の予定としては、10カ月をめどに残りの作業を終わらせ、冊子体で利用可能な形にするとともに、データベースそのものも電子辞書の形で一般公開できるよう次の検討に入りたい。

(2) テルグ語の地理的範囲の特定：

フィールドワークの結果、テルグ語の世界的な使用状況と標準テルグ語の特定の仕方として、以下の点を新たに知見として得ることができた。

①フィジーの状況： フィジーでテルグ語の調査は世界的にもほぼ皆無である。本研究ではインド人学校のテルグ語教員らにインタビューを行った結果、現在のテルグ人とされている人々が実際には移民以前からタミル語・ヒンディー語の強い影響下にあり、現在では母語としてタミル語やヒンディー語にシフトしていることが分かった。マイナー

言語が相対的に有力な周辺言語に吸収されたのである。そのため、現在テルグ語を母語とする人々は非常に少数でほぼ絶滅状態にあることを確認した。

②ミャンマーの状況：ここでは他の地域では得られない大きな発見があった。それはミャンマー特有の歴史・政治的状況から、この地域が他のテルグ人移民地域と非常に異なった言語状況になっていることである。具体的にはマレーシアやシンガポールでは、英語がリンガフランカである中、テルグ語は母語・家庭内言語として維持され続けているが、ミャンマーではテルグ人の人口は少なくないにもかかわらず、公用語と同化政策としてのビルマ語教育が徹底したため、テルグ語話者のほとんどが流暢なビルマ語使用者になっており、テルグ語を家庭内言語としてすら話せなくなっているということである。つまり、第1に国の体制がテルグ語話者に与える影響が従来の想定以上に大きいこと、第2にそのような意味でミャンマーがテルグ語消滅のひとつの最前線(=限界線)であること、第3に、英語教育を受けないミャンマー・テルグ人が、英語を用いる在外テルグ移民ネットワークから排除される可能性があることがわかった。

③マレーシア(ボルネオ)の状況：ここではマレー半島の状況とは全く異なり、テルグ人があまりにも少数なため、独立したコミュニティを形成できる状態にはないことを確認した。つまり、統計上テルグ人がいるということと母語を維持し独自に発展させられる程度のコミュニティがあるということは別であることがわかった。なお、この地域でもテルグ人と思しき人々は実際にはタミル語かヒンディー語の話者になっていた。また、マレーシアのテルグ人世界は基本的にはマレー半島側で終わっており、シンガポールがその最前線であることを確認した。

④マレーシア(マレー半島)の状況：先に述べたように在外テルグ人の居住地域としてはもっとも古く整備されたテルグ人協会を持っている。テルグ人協会の人々の多くは英領時代の移民であり、またインドのタミル地域からの移民が多いため、多くはタミル語とのバイリンガルであった。若い世代にはもやはテルグ語のみならずインド系言語の読み書きがまったくできない人々が増えている。そのような状況下でインフォーマントとなる人々は移民第1か第2世代の老人であり、独自の移民言語を発達させているというよりは、故地の方言を維持している人々がほとんどであった。つまりタミル地域からの移民はタミル語化したテルグ語を、またアーンドラ地域からの移民はそれぞれの地域の方言を維持している。マレーシアのテルグ人同士で婚姻はあるものの、人口がそれなりに

いるためにカーストや(インドでの)出身地ごとに分断されており、マレーシアのテルグ人ということで共通して特徴的な移民言語を発見することはほとんどできなかった。

⑤シンガポールの状況：シンガポールはマレー半島の一部であり行政的にもかつては同じだったことから歴史的背景はシンガポールと重なる。つまり英領時代の移民を基礎にしている。最大の違いはシンガポールにはインドの経済自由化によって90年代以降まったく新しいニューカマーが多く、彼らは最終的にはアメリカ、カナダ、オーストラリアへの移民を目指してシンガポールを足掛かりにする、「腰掛け」である。彼らニューカマーの言語はインド本国のテルグ語そのものであり、特段シンガポールの特徴は見られない。他方、古くからのテルグ移民の状況はマレーシア(マレー半島)と基本的には変わらない。

⑥移民全体に対するグローバリゼーションの影響：本研究を開始した当初は、基本的な単語の使用例の中に代表的な移民言語のいくつかを取り入れるという計画であった。従来の言語調査であれば祖国から遠くなった移民が独自のやり方で母語を維持することはあたりまえと考えられただろう。しかし今回の調査でもっとも衝撃的だったことは、それに反する結果であった。第1に、マレーシア、シンガポールといった相対的に豊かな地域では古い世代のテルグ語話者が故地のテルグ語をそのまま維持しているケースが多く、またインターネットやメディアの普及などでテルグ人自身がインドのテルグ語の「標準」形に自ら常に自分の言語を修正していることである。つまり、グローバルな要因から、現在では移民言語が故郷インドのテルグ語に再帰し、アーンドラ地方のものが標準型として固定化しつつあるのである。第2に、若い世代では周辺のより有力な言語を母語とする傾向があり、マレーシアのタミル語とマレー語、フィジーのタミル語とヒンディー語、ミャンマーのビルマ語もこれにあたる。いずれの場合も受け入れ国側の政治・教育政策と関係があり、その違いによって周辺語への同化の程度やあり様に大きな差が出ている。第3に、しかしながらマレーシア・シンガポールでは英語、フィジーではオーストラリアやニュージーランドへの再移民による英語の獲得が起こっており、テルグ語に限らずインド諸語離れが進んでいる。第4に、以上の状況を概観すれば、インド以外の地域でテルグ語話者の人口は明らかに減少していることになる。そして第5に、現在世界テルグ人をまとめようという動きがあり、アメリカを中心にした世界テルグ人協会という組織などがみられるが、ミャンマーの例から顕著にわかるように、そこに世界全体のテ

ルグ人が統合されていくというよりも、統合されえない人々がいるところに移民文化世界の興味深い点があることである。

(3) 成果の国際的な位置づけ： テルグ語研究に関する国際的な学術状況としては、現時点で信用のおける辞書は唯一 1991 年にオックスフォード大学から出版されたテルグ語－英語辞典があるが、冊子体は絶版になっており入手出来ない。シカゴ大学はこれを電子化しオンライン辞書にして公開したが、次のような欠点があるために一般的な利用に適さない。欠点の第 1 は、ネット上の電子辞書なのでポータブルでなく、電気がないかあっても停電が頻繁にある地域では、携帯することも実用使用することも問題がある、第 2 に、テルグ文字を用いていないので識字学習に適さない。第 3 に、この辞書で使われている英語が一般的な日本人にとって難解であること、第 4 に、見出し語が特定の文語に偏っていることである。

世界的に見て、インドに進出する西欧の国々はすでに各国言語研究および言語教育のインフラを進歩させており、特にフランスとドイツはすでに文法書が出版された。しかし辞書は未刊である（文法書よりも辞書の方が格段に困難である）。この他にはロシア語のものがソ連時代に出版されたが今はない。したがって、日本語のものは事実上 2 番目（日本語ではもちろん最初）となる。英語の次に日本語対応の辞書が作成される意義は大きい。それは他国に比して日本のインド研究の水準が高く、研究者の層の厚さや守備範囲の広さをも示すことになるからである。また当然ながら、他のアジア諸語では文法書・辞書、ともに出されていない。

補足すると、テルグ人移民の多いアメリカ合衆国ではカリフォルニア大学の教養課程の外国語（第二外国語、未修外国語）の選択肢にテルグ語が入っている。アメリカではすでに多くの人々にこの言語の存在自体は知られているが、この点大学での外国語教育が英語に一本化されつつある日本は、状況把握や情報の面でアメリカに逆行し、また遅れていると言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

YAMADA Keiko, 'Origin and Historical Evolution of the Identity of Modern Telugus,' in *Economic and Political Weekly*, vol. XLV 34, August 21, 2010, pp. 57-63.
（査読あり）

〔学会発表〕（計 1 件）

山田桂子, 『Movement for the Separate Telangana State --- the Past and the Present』、日本南アジア学会第 24 会全国大会、2011.10.1、大阪大学

〔図書〕（計 1 件）

山田桂子, 『基礎テルグ語』、大学書林、2010 年、254 頁

〔産業財産権〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 桂子 (YAMADA Keiko)

茨城大学・人文学部・准教授

研究者番号：30344831